

高等学校の「体育に関する学科・コース」に関する研究

野 口 義 之 石 田 保 之 森 田 茂 男
宮 口 尚 義 矢 部 俊 政

A Study of the Physical Education Course and its Teacher in Senior High School in Japan.

Yoshiyuki NOGUCHI, Yasuyuki ISHIDA, Shigeo MORITA
Hisayoshi MIYAGUCHI, Toshimasa YABE

はじめに

全国の教員養成大学・学部にはただ一つの高等学校教員養成課程を設置している金沢大学には、これもまた全国九大学に設置されていた特別教科(保健体育)教員養成課程をも併置され、全国にその例をほかにみることのできないユニークな存在となっている。

さらに、昭和57年度には大学院(修士課程)教育学研究科(保健体育専攻)が設置された。

この高等学校教員養成課程の発足についての歴史的経緯については、これを記述するにふさわしい人にゆずって、ここでは、「金沢大学十年史、1960」、ならびにこの発足に尽力されたもと金沢医大教授秋元波留夫氏(談)によってその概要を(あとがきに)したためておいた。

オリンピック東京大会が開催され、体力づくり運動がはなばなしく展開されたなかで、高等学校進学者の増大は、その教育内容の多様化の線に添って、高等学校にも「体育学科」がばつばつ設置されるきざしがみられた。

あとで詳しくのべるように、普通高等学校に「体育に関する学科」が設置されるに伴って、文部省もそれに関する学習指導要領を公示し

た。普通高等学校の必修の保健体育科を基盤としながら、いうならば、その上に「体育に関する学科」が設置されているという見解によれば、この学科を担当する指導者(教員)には、率直に言ってより程度の高い、より広いもの、いいかえれば高い専門性が求められている。

このような見方と立場に立って、高等学校の教員養成課程と特別教科(保健体育)教員養成課程を併置している本学のスタッフとしては、いわゆる高等学校(普通科の必修の保健体育、体育に関する学科)の体育に関する指導がじゅうぶんできるような大学のカリキュラムを検討する必要があると思っている。

したがって、本研究は、金沢大学の体育教室のスタッフの協力をえながら金沢大学大学院教育学研究科保健体育専攻主任教授野口、体育教室主任教授森田(昭和57、58年度)同石田(昭和59年度)保健体育科教育(中・高等学校)の授業担当矢部教授及びカリキュラム担当の宮口教授の共同研究として取り組んできた。

さらに、全国高等学校体育学科連絡協議会の第17回(1982)大会の資料の提供をえてすすめられた。

ここに、全国高等学校体育学科連絡協議会に対し深甚の謝意を表わすものである。あわせて本研究に資料を提供して下さった各高等学校に対して厚く感謝の意を表わす次第である。

§1. 研究の目的

最近、高等学校に設置されつつある体育に関する学科・コースの実状をたしかめ、そこに存在する次のよう事項にかかわる諸問題を明らかにしながら、その解決の方法をも考えようとするものである。

- ・体育に関する学科・コースのカリキュラム
- ・同学科・コースの運営
- ・同学科・コースの卒業生の進路
- ・同学科・コースの指導者

§2. 研究の方法

体育に関する学科・コースを設置している全ての高等学校を対象に、学校要覧や体育学科・コース案内などに関する諸資料の提供を求めた(昭和58年度頭初)。さらに、昭和56年度第17回全国高等学校体育学科連絡協議会の資料をあわせて本研究の基礎資料とした。

§3. 高等学校の「体育学科・コース」の内容について

1. 高等学校における体育に関する学科の教育課程

教育課程審議会の答申(1976/12/18)によると、「職業以外の専門教育に関する各教科・科目についても、職業に関する各教科・科目の改善の基本方針の趣旨に沿って、専門教育を主とする学科(例えば音楽、美術、理数、体育、英語に関する学科など)における教育が一層適切に行われるよう必要な検討を加える」とされている。

そして、1978年8月30日の告示による改訂高等学校指導要領に、はじめて、専門教育を主とする学科に「体育に関する学科」の目標、内容が明示(詳細は後述)された。また、卒業に必要な修得単位数の計は80単位以上、そのうち

専門教育に関する各教科・科目の単位数は30単位を下らないこととされている。

いまや高校への進学率が94%をこえる今日、体育・スポーツにすぐれた資質を持っているか、または、興味や関心を持っている生徒の能力・適性を伸ばし、より高い運動技能を習得させ、体育に関する教養を高め、健全な心身を育成することによって有意義な高等学校生活が送れるような「体育に関する学科」を設けたことは、未解決の諸問題があるにしても、高校教育の多様化を図るうえから望ましいことにちがいはない。高校卒業後、直ちに、体育(スポーツ)の専門性を生かした職業につくことは困難な現状にあることを考え、体育に関する専門的知識、技能を有する指導者を育成するというよりは、まだ、発育発達の途上にある高校期に、運動の合理的実践によって心身の発達の可能性を最大限に伸展し、体育に関する基礎的、基本的教養を培うことに重点をおくこととしている。

卒業後、体育系大学に進学し、体育・スポーツの指導者を目指すものもでてくるであろうし、ひいては、わが国の体育・スポーツの振興発展に寄与することになるだろう。

このような考えに立って、「体育に関する学科」の専門教育に関する教科の名称を「体育」とし、この教科の目標ならびに各科目の目標及び内容が学習指導要領に明示された。

なお、高等学校学習指導要領に示された「体育に関する学科」に関する基本的事項は次のとおりである。

第1章総則の第2款の2に、専門教科の「各教科・科目の標準単位数については、設置者の定めるところによるものとする」とされ、専門教科「体育」の科目としての体育理論、体操、スポーツⅠ、スポーツⅡ、スポーツⅢ、ダンス、野外運動、体育に関するその他の科目があげられている。

第1章第3款「各教科・科目の履修」の3の(1)の「専門教育を主とする学科においては、専門教育に関する各教科・科目について、すべての生徒に履修させる単位数は、30単位を下らな

いようにすること。(中略) 各学科の目標を達成する上で、普通教育に関する各教科・科目の履習により専門教育に関する各教科・科目の履習と同様の成果が期待できる場合においては、その普通教育に関する各教科・科目の単位を5単位まで上記の単位数に含めることができることとしている。

第1章3款の3の(3)「専門教育に関する各教科・科目の履修によって、すべての生徒に履修させる各教科・科目の履修と同様の成果が期待できる場合においては、その専門教育に関する各教科・科目の履修をもって、すべての生徒に履修させる各教科・科目の単位数の一部又は全部の履修にかえることができることになっている。

2. 体育に関する学科の小史

体育・スポーツに関心を持ち、その能力を伸ばしたいと希望する生徒の進路に応ずるため、昭和25年東京都立駒場高等学校に「保健体育科」が設置されて以来、次第に「体育に関する学科」の設置校が増加し、昭和53年には、公立12校、私立9校、計21校となった。また、普通科の中で、体育に関する学科の設置の前段階とみられる「体育コース」を置く高等学校は公立6校、私立7校、計13校となった。

これが、現在ではさらに増加し、第3, 5表(p. 256, 257)のとおりとなっている。

体育学科が設置されながら昭和45年改訂の高等学校学習指導要領では、「体育に関する学科」に関する各教科・科目の目標・内容・標準単位数は明示されておらず、設置者が適宜定めることになっており、また、「体育に関する学科」の専門教育に関する各教科・科目の単位数の計は、単に、35単位を下らないこととされていたにすぎなかった。

したがって、この規定に則り、全国高等学校体育学科連絡協議会では、一応の共通理解として、「体育理論」、「体育実技」、「保健理論」、「保健実習」の各科目の目標・内容を取り決めていたのである。

かくして、ここに(昭和53年8月30日)はじ

めて「体育に関する学科」の学習指導要領が告示されたのである。

3. 体育に関する学科のねらい、科目の構成およびその内容

ここでは、佐々木、山川による「改訂高等学校学習指導要領の展開」を参考にしながらその概要を述べることにしよう。

(1) 「体育」科の目標

運動の合理的な実践を通して、高度な運動技能を習得させ、心身ともに健全な人間の育成に資するとともに、体育・スポーツの振興発展に寄与する能力と態度を育てる。

「運動の合理的実践」とは、生徒が自己の発達や生活の実情を考慮した運動処方の方法、運動の特性に基づく科学的練習法の理解に基づいて、基礎的・基本的な運動を計画的に実践することである。このような運動の実践によってはいじめて、より高度の運動技能を習得させ、健康の増進と体力の向上を図ることができる、と考えられる。

「高度の運動技能」としたのは、「スポーツⅠ」、「スポーツⅡ」、「スポーツⅢ」、及び「ダンス」の各科目について、生徒が自己の能力・適性に即して、科目を選択し、更に、科目の中の運動種目を選択履習させることになっている。もともと、体育に関する学科の生徒の運動技能は、他の学科の生徒に比べてすぐれており、必修教科の「保健体育」の場合よりも、高度の運動技能を習得させることが可能であると考えられている。

「心身ともに健全な人間の育成」というのは、体育についての科学的な知識理解に基づく運動処方と運動練習法とによって高度の運動技能を習得させ、知・徳・体の調和のとれた健全な人間を育成することを意味している。

「体育・スポーツの振興発展に寄与する能力と態度」というのは、合理的運動実践による高度の運動技能とスポーツ等に関連した好ましいマナーの習得は、わが国の競技技術の水準の向上につながり、また、将来、体育・スポーツの指導者となって、広く「みんなのスポーツ」の

振興に役立てられることにもつながるので、体育・スポーツの普及振興と発展に役立つ能力や態度の素地を養うというのである。

(2) 「体育」科の科目の構成

「体育」科の科目の構成は、体育理論と運動に大別し、運動を体操、スポーツ、ダンスに分け、更に、スポーツを個人的スポーツ、球技、格技、野外活動に分けている。

科目は次のとおりになっている。

- 1 体育理論
- 2 体 操
- 3 スポーツⅠ（個人的スポーツ）
- 4 スポーツⅡ（球技）
- 5 スポーツⅢ（格技）
- 6 野外活動
- 7 ダンス
- 8 体育に関するその他の科目

これらの科目のうち、体育理論、体操、及び野外活動は原則として、体育に関する学科のすべての生徒に履修させる。ただし、野外活動はその内容のうちから一つ以上の種目を選んで指導することとしている。

また、スポーツⅠ、スポーツⅡ、スポーツⅢ及びダンスは、生徒の能力や適性を考慮し、これらのうちから一つ以上の科目を選び、さらに各科目の内容のうちから一つ以上の種目を選んで履修させることができることとしている。したがって、柔道の得意な生徒は、スポーツⅢをえらび、その中の柔道を選んで重点的に学習することが可能となるのである。

なお、これらの専門教科・科目と共通必修教科・科目としての「体育」及び「保健」の関係は、原則的には「体育」及び「保健」を履習した上で、これらの専門教科・科目を積み重ねることになるが、高等学校学習指導要領の第1章総則第3款の3の(3)の規定を活用し、教科「体育」の各科目の履習によって、共通必修の各教科・科目「体育」及び「保健」の履習と同様の成果が期待されると考えられる場合は、「体育」及び「保健」の単位数の一部又は全部の履習と替えるなど、有機的な関係を図って、「体育」

及び「保健」の履習方法をきめることができることになっている。

また、専門教育に関する各教科・科目の「標準単位数は設置者の定めるところによるものとする」（学習指導要領第1章総則第2款の2）とされているので、各学校や地域の特性、学科のねらい、生徒の実態を考慮して設置者が適宜定めることができるようになっている。

4. 体育に関する学科の各科目の目標とその内容

高等学校学習指導要領「体育」の各科目の内容は次のようになっている。

(1) 体育理論

（目標）体育に関する知識を理解させ、運動の合理的な実践及び健康の増進と体力の向上に役立たせるとともに、これらの知識を日常生活に活用する態度を育てる。

（内容）(1)体育原理、(2)運動の生理及び医事、(3)運動の特性と練習法、(4)運動処方、(5)現代社会と運動、(6)体育施設の管理

(2) 体 操

（目標）体操の特性を理解させ、身体のはたらしを高めて体力の向上をはかるとともに、自己の健康や体力に応じた体操を構成し活用する能力と態度を育てる。

（内容）(1)リズムカルな動き、タイミングのよい動き及び素早い動きを高める運動、(2)力強い動き及び動きを持続する能力を高める運動。

(3) スポーツⅠ

（目標）個人的スポーツの特性について理解させ、これらのスポーツの高度な技能と審判法を習得させるとともに、個人の技能を最高度に発揮して競技ができる能力と態度を育てる。

（内容）(1)体操競技、(2)陸上競技、(3)水泳、(4)スキー、(5)スケート、(6)弓道。

(4) スポーツⅡ

（目標）球技の特性について理解させ、これらのスポーツの高度な技能と審判法を習得させるとともに、集団の技能又は個人的技能を生かしたゲームができる能力と態度を育てる。

（内容）(1)バスケットボール、(2)ハンドボー

ル、(3)バレーボール、(4)サッカー、(5)ラグビー、(6)ソフトボール、(7)野球、(8)テニス、(9)卓球、(10)バドミントン

(5) スポーツⅢ

(目標) 格技の特性について理解させ、これらのスポーツの高度な技能と審判法を習得させるとともに、対人的技能を生かした試合ができる能力と態度を育てる。

(内容) (1)柔道、(2)剣道、(3)相撲、(4)レスリング、(5)なぎなた

(6) ダンス

(目標) ダンスの特性について理解させ、その高度な技能を習得させるとともに、創造的な表現の能力と鑑賞力を養う。

(内容) (1)創作ダンス、(2)フォークダンス

(7) 野外活動

(目標) 自然を活用した野外での集団活動を通して野外活動の特性を理解させ、その知識と技能を習得させるとともに、強健な心身を養い、自然に親しむ態度を育てる。

(内容) (1)キャンプ、(2)登山、(3)遠泳、(4)その他の野外活動。

このように、体育学科の内容は、次に略述する普通高等学校の必修としての保健体育のそれよりは、やや専門的に且つ其の範囲が広域にわたっているとみてよい。

高等学校学習指導要領第2章第5節保健体育によれば、以下のような履習が指示されている。

	性 別		男 子			女 子				
共通必修	内 容		30～40%							
	A 体 操									
	B 器 械 運 動									
	C 陸 上 競 技									
	D 水 泳									
選択必修	E 格 技		第1選択	15～20%	第2選択	10～15%			第2選択	10～15%
	F 球 技			20～30%						
	G ダ ン ス			第1選択			20～30%	15～20%		
共通必修	H 体 育 理 論		10%							

内容のAからHまでのそれぞれに割り当てる授業時数は、全学年を通して、上の表に示す割合を標準とし、学校や生徒の実態に即して適切に定めるものとする。ただし、全日制の課程の普通科の男子において、11単位以上履修させる場合には、第1選択の格技に20%を充てるようにする。

5. 体育学科に望まれる指導計画

文部省告示第163号により高等学校学習指導要領は、昭和53年8月30日に改正された。そして、体育に関する学科の各科目にわたる指導計画の作成と内容の取り扱いは次のように示されたのである。

(1) 体育に関する学科における指導計画の作成に当っては、原則として体育理論、体操、及び野外活動が含まれるようにする。ただし、野外活動については、その内容のうちから一以上を選んで指導する。

また、スポーツⅠ、スポーツⅡ、スポーツⅢ、及びダンスは、生徒の能力や適性に応じて一以上を履習させるものとし、それぞれの科目の内容のうちから一以上を選んで指導する。

(2) 体育理論については、運動との関連において必要な保健に関する理論や実習についても適宜指導する。

(3) 第2から第7までの科目の指導に当っては安全に留意するものとし、また集団行動に関する内容についても、それぞれの運動の特性との関連において適切に指導する。

科 目	学期			I												II												III											
	学 年	性 別	単 位	月 週												月 週												月 週											
				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
体 育 理 論	1	男	2	・体育原理・現代社会と運動 (70)																																			
	2	男	2	・運動の生理及び医学・運動処方 (70)																																			
	3	男	2	・運動の特性と練習法・体育施設の管理 (70)																																			
	2	女	1	体 操 (35)																																			
	3	女	1	体 操 (35)																																			
ス ポ ー ツ I	1	男	1	体操競技 (10)												水 泳 (7)												陸上競技 (18)											
	2	男	1	陸上競技 (10)												水 泳 (7)												陸上競技 (10)											
	3	女	1	陸上競技 (10)												水 泳 (7)												陸上競技 (18)											
	2	女	1	サ ッ カ ー (13)												バスケットボール (22)																							
	3	女	1	バスケットボール (13)												バスケットボール (22)																							
ス ポ ー ツ II	1	男	2	バスケットボール (13)												バスケットボール (22)																							
	2	男	2	バスケットボール (13)												バスケットボール (22)																							
	3	男	2	テニス・卓球・バドミントンの選択 (26)												1学期に同じ (28)												サ ッ カ ー (16)											
	1	女	2	バスケットボール (13)												バスケットボール (22)																							
	2	女	2	バスケットボール (13)												バスケットボール (22)																							
ス ポ ー ツ III	1	男	2	バスケットボール (13)												バスケットボール (22)																							
	2	男	2	バスケットボール (13)												バスケットボール (22)																							
	3	男	2	テニス・卓球・バドミントンの選択 (26)												1学期に同じ (28)												バレーボール (16)											
	1	女	1	柔道・剣道の選択 (35)																																			
	2	女	1	柔道・剣道の選択 (35)																																			
ダ ン ス	1	男	1	ダンス (35)																																			
	2	男	1	ダンス (35)																																			
	3	男	1	ダンス (35)																																			
	1	女	1	ダンス (35)																																			
	2	女	1	ダンス (35)																																			
(専攻実技) ス ポ ー ツ I ス ポ ー ツ II ス ポ ー ツ III	1	男	2	体操競技 (10)												水 泳 (7)												陸上競技 (18)											
	2	男	2	陸上競技 (10)												水 泳 (7)												陸上競技 (10)											
	3	女	2	陸上競技 (10)												水 泳 (7)												陸上競技 (18)											
	1	女	2	サ ッ カ ー (13)												バスケットボール (22)																							
	2	女	2	バスケットボール (13)												バスケットボール (22)																							
ダ ン ス	1	男	2	バスケットボール (13)												バスケットボール (22)																							
	2	男	2	バスケットボール (13)												バスケットボール (22)																							
	3	男	2	テニス・卓球・バドミントンの選択 (26)												1学期に同じ (28)												バレーボール (16)											
	1	女	1	柔道・剣道の選択 (35)																																			
	2	女	1	柔道・剣道の選択 (35)																																			
外 活 動	1	男	1	ス ポ ー ツ I												ス ポ ー ツ II												ス ポ ー ツ III											
	2	男	1	ス ポ ー ツ I												ス ポ ー ツ II												ス ポ ー ツ III											
	3	男	1	ス ポ ー ツ I												ス ポ ー ツ II												ス ポ ー ツ III											
	1	女	1	ス ポ ー ツ I												ス ポ ー ツ II												ス ポ ー ツ III											
	2	女	1	ス ポ ー ツ I												ス ポ ー ツ II												ス ポ ー ツ III											

◆立案の基礎

スキーは「個人的スポーツ」の内容であるが、「その他の野外活動」として取り上げた

・ 1 学級 40 人 (男・女同数)
・ 1 学級 9 人 (女 2) ・ 同時展開 8 講座可

らいにより、生徒の能力・適性、進路希望に応じて、科目を幅広く履習させる方法、第1表（p. 254）の例Ⅰと特定の科目、又は種目に重点を置く方法、例Ⅱと例Ⅲが示されている。

③ 学年配当については、各科目を毎学年継続して履習させ、単位数はなるべく均分の方法を原則と考えるが、学年の発達段階、ねらいを考慮して科目・単位数も重点的に扱える方法も考慮されている。要は、科目の設定、生徒数、学年、男女別、施設、指導者等の状況を考慮しその関連において定めることになる。

④ 標準単位の案も示されている。

⑤ 保健体育科の体育は、専門教科・科目の履習で代替し、保健は、保健体育科で履習することになっている。

⑥ 選択必修のダンスは、主として女子に履習させることにしている。

以上の諸点を考慮して各科目、単位数、学年配当等を示したのが第1表である。

なお、体育に関するその他の科目の例示は、指導要領には示されていないが、例えば、レクリエーションゲーム、ストレッチ体操、エアロビツク体操、ジャズ体操、太極拳、ヨーガ等も考えることができるであろう。

次に、これを年間指導計画として、細案的に示すと第2表のような内容が考えられるであろう。

第3表 体育学科を設置している高等学校

番号	都道府県名	学校名	設置年度	学級数	生徒数		
					男子	女子	計
1	北海道	道立 恵庭 高校	44	6	128	80	208
2	岩手	県立 盛岡 高校	58	1	25	15	40
3	栃木	私立 矢板中央高校	57	1	33	7	40
4	埼玉	県立 大宮東高校	55	5	131	71	202
5	"	県立 騎西 高校	53	3	64	36	100
6	"	私立 埼玉栄高校	47	11	407	100	507
7	千葉	県立 八千代高校	46	3	88	33	121
8	"	私立 東京学館高校	57	4	177	0	177
9	"	市立 船橋 高校	58	1	35	12	47
10	東京	都立 駒場 高校	25	3	30	98	128
11	石川	私立 北陸大谷高校	44	3	60	48	108
12	山梨	県立 日川 高校	53	3	104	11	115
13	岐阜	私立 岐阜南高校	42	3	80	29	109
14	"	私立 中京商業高校	43	3	90	34	124
15	大阪	私立 櫻宮 高校	55	6	172	67	239
16	"	私立 浪商 高校	41	6	242	38	280
17	"	私立 大成 高校	57	2	94	0	94
18	兵庫	県立 社 高校	40	3	103	0	103
19	"	私立 夙川 高校	42	3	0	135	135
20	奈良	県立 添上 高校	45	3	83	39	122
21	和歌山	県立 和歌山北高校	39	6	160	70	230
22	島根	県立 大社 高校	48	3	83	39	122
23	高知	県立 城山 高校	45	3	32	13	45
24	熊本	私立 鎮西 高校	42	3	95	28	123
25	大分	県立 佐伯鶴城高校	44	3	77	31	108
26	鹿児島	県立 鹿児島南高校	43	3	74	49	123

第4表 体育学科の設置年度

設置年度	学校数
昭和25年～昭和34年	1校
昭和35年～昭和44年	11
昭和45年～昭和54年	7
昭和55年～現在	7

§4. 研究の結果

1. 体育学科・コースの設置校と設置年

昭和58年現在、高等学校に設置されている体育学科は第3表のとおりである。

体育学科をはじめて設置したのは東京都立駒場高等学校であり、昭和25年であった。それから現在26校を数えるが設置された年度は第4表に示している。

昭和35年～昭和44年の10年間に11校設置されたが、その後は、増加する傾向はみられない。これには、増設するにはやや問題が多すぎるとみられるからであろう。

体育のコースを設置している高等学校は、制

度的には、明確な基準がないので、文部省もこれを正確に把握していない。すなわち、都道府県教育委員会への届出によっており、この調査でも正確を期しえなかった。

体育コースの設置は、一般に、体育学科の設置の準備段階として取り扱っている傾向がみられる。すなわち、まず、体育コースを設置し、

スタッフや施設等を整備し、体育学科の設置を
ねらうのである。

体育コースを設置している高等学校は第5表

第5表 体育コースを設置している高等学校

番号	都道府県名	学校名	設置 年度	学級 数	生徒数		
					男子	女子	計
1	北海道	私立白樺学園高校	58	1	36	0	38
2	〃	私立旭川大学高校	58	2	57	11	68
3	群馬	私立前橋育英高校	51	3	123	0	123
4	〃	私立群馬女子短大 付属高校	56	3	0	107	107
5	茨城	私立常盤女子高校	47	3	0	143	143
6	〃	私立日立女子高校	55	3	0	86	86
7	東京	私立二階堂高校	45	7	0	290	290
8	〃	私立藤村女子高校	37	9	0	426	426
9	〃	私立東亜学園高校	48	3	156	0	156
10	神奈川	県立弥栄西高校	58	1	18	27	45
11	富山	県立水橋高校	58	0	0	0	0
12	石川	県立穴水高校	57	2	38	30	68
13	愛知	県立三好高校	50	9	225	151	376
14	大阪	私立初芝高校	55	5	194	31	225
15	〃	私立此花学院高校	58	2	90	0	90
16	鳥取	県立由良育英高校	44	2	45	26	71
17	〃	県立米子高校	45	2	45	23	68
18	岡山	私立岡山理科大学 附属高校	52	6	203	0	203
19	〃	私立倉敷高校	56	3	130	0	130
20	香川	私立尽誠学園高校	47	6	217	0	217
21	福岡	県立三井高校	58	1	28	17	45
22	大分	県立大分女子高校	37	2	0	71	71
23	鹿児島	県立松陽高校	58	0	0	0	0

註① 鳥取県立由良育英高校、米子高校、大分県立
大分女子高校は2年生から編成。

② 富山県立水橋高校、鹿児島県立松陽高校は56
年度2年生から編成。

③ 学級数は3学年を通しての学級数である。

④ このほか、九州産業大附属九州高校（福岡
県）、PL学園高校（大阪府）新潟青陵高校
（新潟県）、荏田高校がある。

⑤ ④の4校を除いて次のような学科、コースが
ある。

学 科：26校 { 公立：16校
私立：10校

コース：23校 { 公立：9校
私立：14校

⑥ 文部省体育局調、昭和58年5月1日現在
（体育科教育、Vol.31, No.11, P.72より）

のとおりであり、その設置年度は第6表のと
おりである。

第6表 体育コースの設置された年度

設置された年度	学校数
昭和35年～昭和44年度	3校
昭和45年～昭和54年度	8校
昭和55年～ 現 在	12校

体育コースの設置は、最近急に増加してい
ることがうかがわれるのである。

2. 体育学科の入学選抜について

体育学科を持つ高等学校においては、これ
を志願してくる生徒（中学校卒業生）に大き
な関心を示している。それは、入学してく
る生徒の素質によって大学進学や就職とも
かわりが大きく、高等学校としては当然の
ことである。

一般に、体育学科が新しく設置されるか、
体育のコースから体育学科へ発展的に移行
する時は、各方面から、かなり関心がよせ
られるようである。しかし、次第に、この
学科に対する評価がきまり、その関心もう
すれるようである。従って、各学校は、そ
の時期になるとより多く生徒が応募する
ようないろいろなPR対策を講ずることにな
るようである。

例えば、学校当局は、中・高等学校連絡
会を開催したり、中学校訪問などを行って
体育学科のPRにつとめている。また、授
業料免除など、特待生制度のあること、運
動の実技のテストが施行されることなどを
紹介して、対外試合に活躍している運動部
などが選手の勧誘にのりだしているよう
である。このようなPR活動は、主として
事前にパンフレットなどによっているほか、
体験入学を実施しているところもある。

いうまでもなく、入学試験は、学科の筆
記試験（5教科、あるいは3教科）、実技
の試験を実施するほか面接試験を行って
いるところもある。

運動の実技のテストは次のようなもの
が行われている。

最も一般的に行われているものは文部省
制定

のスポーツテストにみられるような運動能力テストや運動適性テストとよばれるようなものが取り上げられている。テストの種目は一定していないが、例えば、50m走、前屈、けんすい、立ち幅とび、ハンドボール投げなどをその内容としている。

佐伯鶴城高校の実技のテストを例示すると次の通りである。

- (1) 運動能力検査：50m走、走り幅とび、ハンドボール投げ、屈腕懸垂持続
- (2) 体力診断：背筋力、握力、垂直とび、反復横とび、立位体前屈、伏臥上体そらし、肺活量
- (3) 健康診断：血圧、脈拍、検尿、校医診断
更に、面接試験を行っているところもある。
そこでは、中学校における競技歴をたずね、体育学科志望の動機や継続の意志を確かめたり、態度や人格などをチェックしている。

推薦入学の制度を設けているところは半数を超えている現状である。

この制度は、調査書の内申、面接、適性、実技の成績を総合して判定される。何といっても中学校長の推薦が基礎条件となり、中学校の県大会における優勝、準優勝などが高く評価されている。一般に、推薦入学者は合格者の20～30%を占めているようである。

いま、八千代高等学校の推薦入学の条件をみると次のとおりである。

- (1) 体育学科を志望する動機及び理由が明白かつ適切であること
- (2) 体育学科に対する適性及び興味、関心を有すること
- (3) 人物がすぐれていること
- (4) 調査書の全学年における教科の評定が優秀であること
- (5) 基礎運動能力及び特技とする運動種目に優れていること

かくして、体育学科への入学志願者数は第7表、第8表のとおりである。

これは、昭和57年度の学校基本調査によるものであり、全国的にみて志願者は非常に多いわ

第7表 中学校から体育学科への志願者数と入学者数

	入学志願者数		入学者数	
	男子	女子	男子	女子
音楽・美術関係	469	3,579	274	2,624
	4,048		2,898	
体育関係	1,587	527	1,054	355
	2,114		1,409	

(学校基本調査報告書、1982より)

第8表 公私立別志願者数と入学者数

		公 立			私 立		
		男子	女子	計	男子	女子	計
志願者数	音楽・美術 関 係	167	877	1,044	282	2,588	2,870
	体 育 関 係	614	299	913	973	228	1,201
入学者数	音楽・美術 関 係	117	745	862	149	1,847	1,996
	体 育 関 係	477	219	696	713	577	1,390

(学校基本調査報告書、1982より)

けではない。美術・音楽関係の学科より体育に関する学科の入学がややむつかしいようである。そして、前者は女子生徒が多く、男子は10%ぐらいが入学しているが、体育学科では女子が男子に比べて少なく約1/3にすぎない。

3. スタッフについて

体育学科、コースを設置している学校の保健体育の教師は、おおむね平均11から13人であり(第9表)、すべての個人がことなったスポーツを専門としているのではないが、そのバリエーションは大きい。すなわち、できるだけ多くのスポーツ種目の指導ができる態勢が整えられているように見える。

実は、後述するように、体育学科やコースを持つ学校の、それぞれの教育課程には、多くのスポーツを履習するようになっているので、スタッフの数の多いこと、専門種目に変化のあることは当然である。

公立高等学校、たとえば鹿児島南高校のように20人を越えるところもあり、非常勤講師を充

第9表 体育担当職員の専門種目数

種 目		性 別		学 科 施 置 校				コ ー ス 施 置 校				合 計
				公 立		私 立		公 立		私 立		
				男	女	男	女	男	女	男	女	
陸 上		23	1	16		8	1	7	1	57(15)		
水 泳		12	8	12	3	6	3	9	5	58(15)		
バ ス ケ ッ ト		8	1	8	1	1		1		20(5)		
バ レ ッ ト		8	1	11	2	7		3	2	34(9)		
卓 球		17	4	8		3	1	5	1	39(10)		
軟 式 庭 球						1	1	3	1	6(2)		
ハ ン ド ボ ー ル		2	1			1		5		9(2)		
サ ッ カ ー		8	1	8	1	1		1		20(5)		
ラ ッ グ ビ ー		7		8		2		2		19(5)		
相 撲		5		6		2				13(3)		
柔 道				2						2(0.5)		
剣 道		9		11		2		4		26(7)		
軟 式 野 球		10		12		2		1		25(7)		
硬 式 庭 球								3		3		
ボ ク シ ン グ		2						3		5(1)		
レ ス リ ン グ		4		2						2		
ホ ッ ケ ー				1		2				5(1)		
硬 式 野 球		8		1						2		
ダ ン ス			1		3		1		2	9(2)		
空 手					2					7(2)		
バ ド ミ ン ト				1						2		
フ ェ ン シ ン グ									1	1		
ウ ェ イ ト リ フ テ ィ ン グ		1	1						1	3		
ア メ リ カ ン フ ッ ト		1		1						2		
カ ス ー									1	1		
新 体 操			1							1		
自 転 車		1								1		
ス キ ー		1								1		
ソ フ ト		1		3				1		5		
合 計		128	20	112	12	38	7	48	15	380		
不 明 数		(-10)		(- 6)		(- 4)		(- 6)		(26)		

() は %

実して指導陣を強化することも、また法的に許されている実習助手の配置を望む声も強いようである。普通科の「保健体育」の教師を兼務しているが、より高い指導力が望まれることになるう。

4. 体育学科の教育課程の編成について
体育学科の教育課程は、冒頭にのべたように、新しく指導要領に明示されているので学校によるバリエーションは非常にすくない。いま、本調査に当って資料として提供されたもの

の一部を示すと次の体育学科の教育課程表(例)ならびに大社高校、添上高校および八千代高校(p. 263, 264)の例のようにになっている。

なお、体育学科の卒業生が大学を受験するという立場から、いろいろと配慮されている。い

ま、日川高等学校の教育課程の編成において配慮されている事項を例示すると次の第10表—1～4のようである。

すなわち、専門教科は3年間に30～35単位程度とし、普通教科については、普通科の生徒用

体育学科の教育課程表(例)

学 校 名			鹿児島県立鹿児島南高校				愛知県立三好高校				石川県立穴水高校				
専門教科	科 目	標準 単位数	1 年	2 年	3 年	計	1 年	2 年	3 年	計	1 年	2 年	3 年	計	
	体育理論	6～8	1	1	2	33	1	1	1	23 (21)				21 (17)	
	保健理論	2～4	1	1			1	1	1		1	1			
	体 操	3～4	1	1	1			1							
	スポーツⅠ	3～6	1		2			2				6	7		6
	スポーツⅡ	6～10	2	1	1			5 (3)	5			(4)	(5)		
	スポーツⅢ	3～4		2				2 (0)							
	ダ ン ス	3～4						(2)							
	専攻実技	6～9	4	4	4										
	野外活動	3～4	1	1	1		1	1							
	そ の 他														
	小 計		11	11	11		33	8	8 (6)		7	23 (21)	7 (5)		8 (6)
特 別 活 動				2	2	2	6	2	2	2	6	4	4	4	12
総 計				35	35	35	105	32	32	32	96	34	34	34	102

学 校 名			東京都立駒場高校				千葉県立八千代高校				兵庫県立社高校			
専門教科	科 目	標準 単位数	1 年	2 年	3 年	計	1 年	2 年	3 年	計	1 年	2 年	3 年	計
	体育理論	6～8	2	2	2	45 (41)	1	2	2	34 (30)	1	1	1	32
	保健理論	2～4	1	1			1	1			1	1		
	体 操	3～4	1	1	1						1	1	1	
	スポーツⅠ	3～6					2	5	8		1	1	1	
	スポーツⅡ	6～10	6	7	7		(3)	(6)	2		2	2		
	スポーツⅢ	3～4		(5)	(5)				2		2	2		
	ダ ン ス	3～4												
	専攻実技	6～9					3	2	3		2	2	2	
	野外活動	3～4	2	2	2		1	2	1		1	1	1	
	そ の 他				2									
小 計			12	13 (11)	20 (18)	45 (41)	8	12 (10)	14 (12)	34 (30)	11	11	10	32
特 別 活 動			2	2	2	6	2	2	2	6	2	2	2	6
総 計			37	37	35	107	32	32	32	96	32	32	32	96

体育学科の教育課程表(例)

学 校 名			島根県立大社高校					高知県立城山高校					大分県立佐伯鶴城高校				
専門教科	科 目	標準 単位数	1 年	2 年	3 年	計	1 年	2 年	3 年	計	1 年	2 年	3 年	計			
	体育理論	6～8	1	2	2	34 (30)	1	1	1	50 (46)	2	2	4	39 (35)			
	保健理論	2～4					1	1			1	1	1				
	体 操	3～4	1	1	1		1	1	1		1	1	1				
	スポーツⅠ	3～6	1	2	1		3	4	4		1	2 (1)	2 (1)				
	スポーツⅡ	6～10	1	2	3		5 (3)	9 (7)	9		2 (0)	3 (2)	3				
	スポーツⅢ	3～4	1	1	1		1 (0)	1 (0)	1 (0)		1 (0)	1 (0)	1 (0)				
	ダ ン ス	3～4					(1)	(1)	(1)		(1)	(1)	(1)				
	専攻実技	6～9	3 (1)	4 (2)	3						2	2	2				
	野外活動	3～4	1	1	1		1	2	2		1	1	1				
	そ の 他																
	小 計		9 (7)	13 (11)	12	34 (30)	13 (10)	19 (17)	18	50 (46)	11 (9)	13 (11)	15	39 (35)			
特 別 活 動			2	2	2	6	2	2	2	6	2	2	2	6			
総 計			34	34	34	102	35	36	36	107	35	35	35	105			

学 校 名			夙 川 学 院 高 校					初 芝 高 校				大 成 高 校			
専門教科	科 目	標 準 単位数	1 年	2 年	3 年	計	1 年	2 年	3 年	計	1 年	2 年	3 年	計	
	体育理論	6～8				31	2	2	2	39 (35)	1	1	1	32	
	保健理論	2～4					2	2	2		2	2	1		
	体 操	3～4	8	10	13										
	スポーツⅠ	3～6					8	7	11		3	3	3		
	スポーツⅡ	6～10					(6)	(5)			2	2	2		
	スポーツⅢ	3～4									2	2	1		
	ダ ン ス	3～4													
	専攻実技	6～9													
	野外活動	3～4									2	2			
	そ の 他								1				2		
	小 計		8	10	13		31	12 (10)	11 (9)		16	39 (35)	12		12
H・R、クラブ活動、 ゆとりの時間等			5	4	4	13	2	2	2	6	2	2	2	6	
総 計			38	39	39	116	32	32	32	96	34	34	34	102	

と大差ないように配慮されている。それは、校外実習などを長期休暇中に実施したり、専攻実技は7校時に実施したりして普通科の標準単位が消化できるように配慮し、さらに、ある授業は普通科の生徒と混合して実施している。な

お、課外授業、模擬試験など希望により普通科と同様な取り扱いをしている。

次に体育学科のカリキュラムを示してみよう。(p. 260～262)

体育学科の教育課程表(例)

学 校 名			新 田 高 校				日 立 女 子 高 校				群 馬 女 子 短 大 附 属 高 校			
専門教科	科 目	標準 単位数	1 年	2 年	3 年	計	1 年	2 年	3 年	計	1 年	2 年	3 年	計
	体育理論	6～8	1	1	1	38				29		2	2	34
	保健理論	2～4	2	2	2		1	1			1	1	1	
	体 操	3～4	1		1						1	1		
	スポーツⅠ	3～6	2		1						2	2	3	
	スポーツⅡ	6～10	4	7	6		10	10	7					
	スポーツⅢ	3～4	2	1	1									
	ダ ン ス	3～4									1	1		
	専攻実技	6～9									5	5	5	
	野外活動	3～4												
	そ の 他		1	2										
	小 計		13	13	12	38	11	11	7	29	10	12	12	34
H・R、クラブ活動、 ゆとりの時間等			1	1	1	3	4	3	3	10	3	2	2	7
総 計			35	36	34	105	34	34	34	102	34	34	34	102

学 校 名			東 京 学 館 高 校				岐 阜 南 高 校				北 陸 大 谷 高 校			
専門教科	科 目	標準 単位数	1 年	2 年	3 年	計	1 年	2 年	3 年	計	1 年	2 年	3 年	計
	体育理論	6～8	2	2	2	41	2	2	3	30 (26)	1	2	1	34 (32)
	保健理論	2～4	1	1			1	1			1	1	2	
	体 操	3～4					1	2 (0)	2 (0)					
	スポーツⅠ	3～6	2	5	8		1	1	3		5	4	6	
	スポーツⅡ	6～10					2	2	2		(3)	(3)	(7)	
	スポーツⅢ	3～4					1 (0)	2 (0)	2 (0)					
	ダ ン ス	3～4					(1)	(2)	(2)					
	専攻実技	6～9	5	4	5						2	2	2	
	野外活動	3～4	1	2	1									
	そ の 他										1	2	2	
	小 計		11	14	16		41	8	10 (8)		12 (10)	30 (26)	10 (8)	
H・R、クラブ活動、 ゆとりの時間等			1	1	1	3	2	2	2	6	4	4	4	12
総 計			33	33	33	99	33	33	33	99	34	34	34	102

さきに紹介した日川高等学校の教育課程全体の様相は、さきの第10表—1~4に明示したとおりである。これによると、専門教科は、3年間を通じて35単位を設けている。

5. 運動部の活動状況

体育学科の生徒は、第11表に示すとおり、いろんな運動部に所属し活動している。これは、その学校の代表選手的活躍を意味し、それがむ

1 大社高等学校の例

	学年	種 別	単 位 数	内 容
実 技	1	共 通	4	体操，器械体操，陸上，バレー，バスケット，サッカー，柔剣道，ダンス，卓球など
		専 攻	(男) 3 (女) 1	(男) 硬式野球，器械体操，陸上，剣道，サッカー，柔道 (女) 器械体操，陸上，剣道，バレー
		野外活動	1	キャンプ
	2	共 通	6	1年生時の内容に，軟式庭球，ソフト，バドミントンなどを加える。
		専 攻	(男) 4 (女) 2	1年生時と同じ
		野外活動	1	スキー
	3	共 通	6	2年生時と同じ
		専 攻	3	1年生時と同じ
		野外活動	1	遠 泳
理 論	1	体育理論	1	心身の機能，健康と環境，体育原理
	2	体育理論	2	職業と健康，集団の健康，体育史，運動生理
	3	体育理論	2	体育心理，救急処置，社会体育，体育測定法

2 添上高等学校の例

(1) 実技および理論

	学 年		単位数	内 容		
実	1年	男	体操	1		
			スポーツⅠ	2	陸上競技，体操競技，水泳競技	
			スポーツⅡ	2	ラグビー，ハンドボール，バレーボール	
			スポーツⅢ	1	剣道，柔道	
		女	体操	1		
			スポーツⅠ	2	陸上競技，体操競技，水泳競技	
			スポーツⅡ	2	ハンドボール，バスケットボール，バレーボール	
			ダ ン ス	1		
	技	2年	男	体操	1	
				スポーツⅠ	2	陸上競技，体操競技，水泳競技
				スポーツⅡ	4	ハンドボール，バレーボール，バスケットボール，ラグビー
				スポーツⅢ	1	剣道，レスリング
女			体操	1		
			スポーツⅠ	2	陸上競技，体操競技，水泳競技	
			スポーツⅡ	4	ハンドボール，バレーボール，バスケットボール，卓球	
			ダ ン ス	1	柔道，剣道，バレーボール，テニス	水泳
3年		男	共 通 実 技	4	体操器械，陸上競技，バスケットボール，ラグビー，サッカー	
			専 攻 実 技	3	柔道，剣道，バレーボール，テニス	水泳

理 論	女	共通実技	4	テニス、ハンドボール、ダンス、陸上競技、バレーボール	
		専攻実技	2	体操競技、ソフトボール、バスケットボール	水泳
	1 年	体育理論	1	体育原理、体育史、体育測定	
		保 働	1	心身の機能、健康と環境	
	2 年	体育理論	1	運動生理、トレーニング、運動力学	
		保 健	1	職業の健康、集団の健康	
	3 年	体育理論	1	体育心理、社会体育、体育管理	
		保健理論	2	運動と生活、性と成熟、集団の健康	

(2) 校外実習

学年	種 目	場 所	日 程	実 習 内 容
1年	水泳実習 (7月)	福井県若狭湾 (大飯郡高浜町)	4泊5日	入水より各泳法(平泳ぎ、横泳ぎ、立泳ぎ)遠泳 講義(海での水泳管理、救急法及び看護)
2年	スキー実習 (2月)	長野県岩岳スキー場 (北安曇郡白馬村)	6泊7日	実技(初歩動作、基本技能、発展技術)理論(スキー に関する知識、用具の知識、スキー傷害、冬山の 知識、パッチテスト(S.A.J公認))
3年	キャンプ実習 (9月)	奈良県立青少年野外 活動センター (吐山第2センター)	3泊4日	テントクラフト・自炊(全)・ローピング・サイクリ ング・自然観察・天体観察・CF・CS・オリエンテ ーリング・ボランティア活動・講義

(3) そ の 他

○学科集会(毎月1回) ○集中講義・講演(学期に1回) ○卒業論文(3年生)

3 八千代高等学校の例

(1) 理論および実技

	学年	科 目	単位	内 容
理 論	1	体 育 理 論	1	体育原理、運動生理
		保 健	1	I 心身の機能 II 健康と環境
	2	体 育 理 論	2	体育と体育心理、運動の心理、社会体育の意義、社会体育の指導者
		保 健	1	III 職業と健康 IV 集団の健康
	3	体 育 理 論	2	体育測定(検査や測定の意義と役割、検査や測定の方法、統計法)
実 技	1	体 操 スポーツ I, II	2	体操、体操競技、水泳、陸上競技、ハンドボール
		専 攻 実 技	3	バレーボール、バスケットボール、サッカー、体操競技
	2	スポーツ I, II, III	男5 女3	体操競技、水泳、陸上競技、バレーボール、柔道、剣道
		専 攻 実 技	2	バレーボール、バスケットボール、サッカー、体操競技
	3	体 操、ダン ス スポーツ I, II, III	男8 女6	体操、水泳、陸上競技、バスケットボール、テニス、サッカー、柔 道、剣道
		専 攻 実 技	3	バレーボール、バスケットボール、サッカー、体操競技

(2) 野 外 活 動

学 年	1 年	2 年	3 年
内 容 場 所	キ ャ ン プ (西湖) (2泊3日)	ス キ ー (妙高高原) (5泊6日)	遠 泳 (館 山) (2泊3日)

第10表—1 教 育 課 程 表

教科	科目	標準単位	学年	1	2	3	(計)
国 語	現 古 典 国 語 Ⅱ	⑦ ⑤ ③		2 2	3 3	3 3 2	8 5 7 3 16~18
社 会	倫 理 社 会 史 A	② ② ③ ③ ③		3	3	2 2 3 3 13 2 2 4	13~15
数 学	数 学 Ⅱ	⑥ ⑤		6	5	2	11~13
理 科	化 学 Ⅰ	③ ③		3	3	2 2	6~8
芸 術	音 美 書 道	② ② ②		2 2 2	2		2
外 国 語	英 語 B	⑮		6	6	5 2	17
普通教科単位合計				(24)	(23)	(22)	(69)
体 育	体 育 理 論 Ⅰ	②~④		1	1		2
	体 育 理 論 Ⅱ	②~④				2	2
	体 育 実 技 Ⅰ (共通)	⑫~⑮		5	5	5	18
	体 育 実 技 Ⅱ (専攻)	⑥~⑫		2	3	3	5
	体 育 実 技 Ⅲ (校外実習)	③~⑥		2	2	1	5
	保 健	③~⑥		1	1	1	3
体育科単位合計				(11)	(12)	(12)	(35)
	ホ ー ム ル ー ム	(3)		1	1	1	3
	全 員 参 加 ク ラ ブ	(3)		1	1	1	3
単 位 数 総 計				37	37	36	110

第10表—2 普通科との比較

教 科 (目)	体 育 科	普 通 科 (文科系コース)
国 語	16~18	17
社 会	13~15	16
数 学	11~13	16
理 科	6~18	14
芸 術	2	3
英 語	17	17
家 庭	0	女 (4)
体育専攻~保健体育	35	13
ホ ー ム ル ー ム	3	3
全 員 参 加 ク ラ ブ	3	3
計	110	102

しろ期待されている、とみてよい。したがって中学校卒業生のその学校への勧誘は、学校当局よりはその運動部が当たっていることについてはさきにふれたとおりである。

なお、体育科生徒のその運動部で占める割合の少ない、いわゆるマイナースポーツには、体操競技、新体操、自転車、レスリング、水球、アメリカンフットボールなどがあげられる。

いずれにしても、スポーツ種目の多様化が目立っている。

これらのスポーツ施設に関しては、メジャースポーツについてはその不備をかこっているがマイナースポーツについてはあまり不満はない

第10表—3 体育学科の実技

学年	単位	内 容
共通	1 5	陸上競技・ハンドボール・ラグビー・柔道
	2 5	サッカー・バスケットボール・陸上競技・体操・柔道
	3 5	バスケットボール・ラグビー・バレーボール・体操・レクリエーション種目(ソフトボール・テニス)
専攻	1 2	サッカー・陸上競技・ラグビー・ハンドボール・バスケットボール・柔道・テニス
	2 3	同 上
	3 3	同 上
校外実習	1 2	遠泳(南伊豆, 弓ヶ浜3泊4日7月12日(土)~15日(火))
	2 2	スキー(白馬村八方尾根スキー場1月12日(月)~16日(金))
	3 1	キャンプ(丹波山村, 甲武キャンプ場2泊3日7月9日(水)~11日(金))

第10表—4 体育学科の体育理論

学科	単位	内 容
体育	1 1	体育原理・体育史・体育心理
	2 1	トレーニング・運動生理・運動力学
	3 2	体育測定・体育管理・社会体育・グループ研究
保健	1 1	健康の獲得と成立・心身の発育と発達・疾病と傷害
	2 1	環境と健康・運動と生活
	3 1	性と成熟・集団の健康

ようである。

6. 卒業後の進路

体育学科生の卒業後の問題は、体育学科を設置している高等学校の最も重大な問題である。その結果は、入学試験の応募者数にも関係するものである。

卒業後の進路は、第12表に示すとおり体育系大学へ進むものは僅少である。

そして、体育系大学へ進学し、そこを卒業したあとで、どの方面へ進んでいるかをみると第13表の通り男女とも学校の教員になるものが圧倒的に多い。社会体育が、生涯体育の振興の意

第11表 運動部と運動部員数

種 目	全部員数(名)	体育科生数(名)	割合(%)	校数
硬式野球	1,569	558	36.6	27
陸上競技	1,459	807	55.3	32
体操競技	446	292	62.1	32
水泳	475	228	48.0	23
剣道	721	192	26.6	26
柔道	509	126	24.5	23
卓球	443	83	18.7	18
バレーボール	1,159	460	39.7	35
バスケットボール	1,096	400	36.5	32
ソフトボール	393	134	34.1	14
ハンドボール	568	223	39.3	16
軟式庭球	993	194	19.5	17
硬式庭球	117	16	13.7	4
ラグビー	369	118	32.0	10
サッカー	1,062	341	32.1	27
バドミントン	258	54	20.9	10
新体操	117	75	64.1	4
フエンシング	95	46	48.4	4
自転車	31	16	51.6	3
ナギナタ	26	2	7.6	2
レスリング	77	39	50.6	5
ウェイトリフティング	62	24	38.7	4
ボート	12	5	41.7	1
登山	23	0	0	1
民族舞踊	34	3	8.8	1
スキ	15	1	6.6	1
水球	20	16	80.0	1
ボクシング	73	15	20.5	4
ダンス	11	7	63.6	1
相撲	7	2	28.6	1
空手	53	4	7.5	3
弓道	86	7	8.1	4
軟式野球	87	3	3.4	1
ゴルフ	54	6	11.1	2
アメリカンフットボール	24	12	50.0	1
バトントワラー	58	14	24.1	1

味から重要視されているにもかかわらず未だその需要は少ない。しかし、体育指導委員(地方教委の非常勤公務員)、スポーツ指導員(日本体育協会)、スイミングスクール、体操クラブなどクラブの指導者などの需要は次第に増加するものと考えられ、この方面の開拓が望まれている。

第12表 卒業後の進学、就職状況

		公 立	私 立
進 学	体 育 系 大 学	17(%)	12(%)
	一 般 大 学	18	10
	各 種 専 門 学 校	10	12
就職その他	就 職 内体育関係 ()	47 (3)	53 (4)
	そ の 他	8	2

(公立15, 私立12校の現状)

第13表 体育系大学進学者の大学卒業後の進路状況

	教 員	社会体育	そ の 他
男 子 336 名	159 名 (47.3%)	46 名 (13.7%)	131 名 (39.0%)
女 子 158 名	94 名 (59.5%)	28 名 (17.7%)	36 名 (22.8%)
計 494 名	253 名 (51.2%)	74 名 (15.0%)	167 名 (33.8%)

(昭和50年3月大学卒業以降・16校の集計結果)

- (注)・教員(幼稚園・小学校・中学校・高校・大学を含む)
・社会体育(スイミングスクール、体操クラブ、スポーツ指導員など)
・その他(一般企業、公務員、不明など)

大学への進学に関しては推薦入学の問題がある。大学進学者のうち推せん入学した体育学科を卒業した生徒数は158人で全進学者571人の27.8%を占めている。体育系大学に進学した244人のうち91人(27.3%)が推薦入学によって進学している。また、一般大学に進学した327人のうち67人(20.1%)が推薦入学によって進学している。勧誘によって進学したものは推薦入学者158人のうち31人(19.6%)を数えることができる。(昭和57年度連絡協議会資料による)

(1) 就 職

体育学科を卒業して直ちに就職するものは、製造業、卸小売業、サービス業などに多く、ついで、金融保険、公務員などが多い。

勧誘によって入社したものもわずかを数えることができるがその数は至って少ない。

すなわち、体育学科としての専門を活用した就職口は甚だ少ないのが現状である。

(2) 進 学

体育に関する学科・コースの生徒にとって、大学への進学はなかなか困難である。いうまでもなく、高等学校のカリキュラムには、体育を専門とする教育課程が多く、およそ普通科の生徒よりは進学にはむいていないからである。

ところが最近、共通一次の試験はうけるにしても、例えば筑波大学のように、運動技能、スポーツにすぐれている者を推薦入学させる制度がみとめられる大学も現われてきた。

ここでは、体育学科・コースを卒業する生徒がその専門性を生かして受験するであろう体育関係の学部、教員養成学部学科などを中心に進学についてのべよう。

① 高等学校の保健体育の教員養成課程

わが国には、制度上、高等学校教員養成課程(保健体育)(定員20人)が唯一つ金沢大学教育学部に設置されている。これと同じ性格の課程は、ほかの教科についても全国どこにもなく独特のものである。

② 特別教科(保健体育)教員養成課程

新制大学発足後まもなく、盲学校、ろう学校および幼稚園の教員養成課程が設置されたが、1952年度から、特別教科教員養成課程が新設され、一般に養成困難な分野の教員養成が行われてきた。

1952年に、金沢大学教育学部に、わが国においてはじめて特別教科(保健体育)教員養成課程が定員30人として発足し、1953年には福島大学教育学部、鹿児島大学教育学部に同課程が設置されることになり、全国で九大学(下記)を数えるが、今やその一部は、教育学研究科(大学院修士課程)へ発展することになった。

特別教科(保健体育)教員養成課程は、金沢大学(昭27)、鹿児島大学(昭28)、広島大学(昭29)、福島大学(昭28)、京都教育大学(昭34)、東京学芸大学(昭40)、高知大学(昭40)、島根大学(昭42)、福岡教育大学(昭42)に設置され、いずれも学生定員は1学年30人である。

③ 体育学部・体育学科など

「体育に関係する」学部や学科を設置してい

る国立・私立大学（4年制）には次のようなものがある。（ ）の数字は学生定員である。

国立大学には次の8大学がある。東京大学（教育学部，体育学健康教育学専攻，10），お茶の水女子大学（文教育学部，舞踊教育学専攻，27），奈良女子大学（文学部教育学科体育学専攻，25），筑波大学（体育専門学群，体育方法学，コーチ学，健康教育学専攻，240）ならびに新しい構想の上に設置された兵庫教育大学，上越教育大学，鳴門教育大学と国立体育大学としての鹿屋体育大学（140）をあげることができる。

私立大学には次の大学がある。

仙台大学（150），国土館大学（150），順天堂大学（140），東京女子体育大学（150），東海大学（280），日本大学（200），日本女子体育大学（150），日本体育大学（620），中京大学（350），中京女子大学（50），大阪体育大学（200），武庫川女子大学（100），天理大学（120），福岡大学（150），早稲田大学（100）。

④ 専攻科

これらのほか，学部レベルより高い専攻科や大学院研究科を設置している大学には次のようなものがある。

専攻科を設置している大学は福島大学，京都教育大学，島根大学及び鹿児島大学の4大学である。いずれも，教員養成大学，学部で，定員は5人である。

⑤ 短期大学

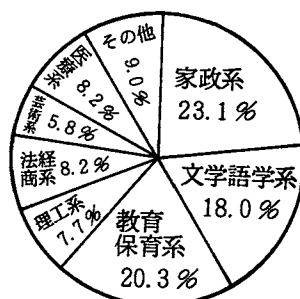
体育学科・コースの卒業生のなかで，短期大学の進学を希望するものがみられる。そもそも短期大学には，大学のような学部組織はなく，1学部で構成される単科大学のような形を取り学科が専攻部門をおくようになっている。

現在，全国の短大におかれている学科，専攻には次のようなものがある。

1 法，経，商系，2 文学・語学系，3 理工系，4 農学系，5 家政系，6 看護・衛生系：看護，保健，保健体育，診療放射線，衛生技術…，7 教育・保育系：児童教育，初等教育，幼児教育，保育…，8 社会事業系，9 音楽，美

術，造形，デザイン…，10 その他

かくして短期大学を修了した後は下図のような方面へ就職しているのである。



短期大学のなかで，体育学科を設置している公立の短期大学は次の二大学だけであり，いずれも女子のためのものであり男子は入学できない。（ ）内は学生定員である。

岡山県立短期大学（女子，50），長崎県立女子短期大学（45）

体育学科を設置している私立の短期大学

いずれも女子のためのものであり，次に掲げる8校である。（ ）内に学生定員を示しているが，第1学年の入学定員は全部で780人にすぎない。

北海道女子短期大学：保健体育科（養護教諭コース，体育コース）150，東京女子体育短期大学：保健体育学科100，日本女子体育短期大学：体育科（体育専攻）100，舞踊専攻（教職コース，専門コース）50，日本体育大学女子短期大学部：体育科60，中京女子大学短期大学部：体育科50，大阪成蹊女子短期大学：体育学科80，武庫川女子短期大学：体育科60，九州女子短期大学：体育科，50

なお，わが国の短期大学は543校を数えることができるが，その中203校に初等教育学科，児童教育科，保育科など小学校以下の子供を対象にした幼児教育関係の教員を希望する学生を収容し，定員数は約25,000人である。

⑥ 大学院研究科

一般に，現在教員養成大学の大学院研究科（修士課程）は，「学部における一般的並びに専

専門的教養の基礎のうえに、広い視野に立って精深な学識を修め、専門分野並びに教育実践の場における理論と応用の研究能力を高め、もって教育研究を推進し得る能力を養うことを目的とする。」—大阪教育大学大学院教育学研究科—、といったものが多い。

すなわち、教員養成大学の修士課程を修了して1級の免許状が与えられることになっているにもかかわらず、修士課程の目標に、そのようなことを掲げるところは見当らない。したがって、次のような教員免許法とからみあいながら教員の資質向上とはかかわりが非常に少ないといわなければならない。ここには、教員養成大学に設けられる大学院の本質的問題が存在していることを指摘しておこう。

具体的事例を金沢大学にみると次のとおりである。

金沢大学大学院教育学研究科規則第17条には「所要の基礎資格を有する者が研究科において教育職員免許法及び同施行規則に定める単位を修得したときは別表第3に示す教育職員免許を取得できる、ことになっている。研究科において、保健体育専攻を修了したものには、高等学校の保健体育教諭1級の普通免許状が取得できることになっている。

しかし、都道府県立の高等学校の教員の採用に当っては、いわゆる教員採用試験が行われ、現段階においては、教員免許の制度により、大学院の課程を修了していても特別有利に取り扱われていないのである。

上級の資格（高校一級免許状）を獲得できる大学院には次のようなところがある。（ ）内の数字は院生の定員である。

東京大学（4）、お茶の水女子大学（10）、筑波大学（60）、奈良女子大学（6）、兵庫教育大学、上越教育大学のほか、次の教員養成大学に設置されている。東京学芸大学（18）、大阪教育大学（10）、愛知教育大学（9）、横浜国立大学（5）、岡山大学（5）、広島大学（5）、静岡大学（5）、金沢大学（10）、千葉大学（5）、福岡教育大学（5）。

私立大学の体育学に関する大学院は、順天堂大学（21）、東海大学（10）、日本体育大学（25）、中京大学（10）に設置されている。

体育学の博士課程は、東京大学（4）と筑波大学体育科学研究科（10）に設置されているがほかの大学には未だみあたらない。金沢大学では、体育学専門ではないが、総合科学的立場から体育の分野の博士課程が構想中である。

（2）文部省の検定試験

教育職員免許状は、同免許法によって免許状は1級と2級がある。免許法の改正によってこれが3階級になることが考えられている。

ところが、大学において、免許法にきめられた単位が修得できることになっているが、同免許法第16条によって、同法第4条第5項第2号に掲げる教科のほかこれらの教科の領域の一部に係る事項で文部省令の定めるものについて高等学校の免許状を与えることができることになっている。

そしてその教科は、柔道、剣道、建築、インテリア、デザイン及び計算実務である。

柔道、剣道は、保健体育という教科の学習内容となっており、戦後、いわゆる武道を専門とする教員の養成機関が少なくなったので、したがってその指導者が不足しているからである。

さきに示したように、私立大学に武道学科などが設置されているがまだ不十分であるようである。

§5. 体育学科・コースの設置にみられる諸問題とその対策

1. 教育課程の編成とその実施上の問題

学習内容については、公示された学習指導要領に明示されているが、多様な専門教科ごとの適当な指導者を求めることには困難があるようである。スタッフが普通科の保健体育担当のものも含めて10人をわずかに越える程度の学校では、教師の専門性からみて教科内容の十分な指導は甚だ困難なようである。また、女子の指導者の不足を訴えているところもみられる。

このことは、体育実技の授業時間の不足とな

って表われている。進学を希望する生徒が増加し、共通一次試験に備える必要もあるので、それがいきおい専門科目の時間にしわよせされるという。

高等学校の普通科にみられる「勉強と運動」という矛盾、なやみは体育学科・コースの生徒たちにも悩みの種となっているほか、学校当局の悩みでもあるようである。

2. 職員の構成

さきにふれたとおり、体育学科・コースを設置している高等学校の保健体育担当のスタッフ数は10人を僅かに越える程度のところが多い。なかには(鹿児島南高等学校)20人以上にも達しているところもみうけられるが、カリキュラム(学習内容)の多様化にともなってスタッフの不足は深刻である。これは、学科が希望する専門種目(教科)の先生がえられない、という悩みとなっている。

学校の設置者は、特に、スタッフの強化に力を入れる必要があり、単に人数を増加させることを配慮するばかりではなく、教員の専門性をもあわせて考慮すべきである。

有能な講師の採用も考慮してよいし、授業の効率を上げるためには、法的に許されている実習助手の配置も考えられるべきであろう。

これを要するに、体育学科・コースを設置している学校においては、生徒数の規模にもよるが、大体15人ぐらひは必要であろう。

3. 卒業後の進路

(1) 進学について

普通科と併置されている体育学科の生徒には、進学を希望するものが次第に増加している。体育学科の卒業だけでは、後に述べるように、必ずしも適当な就職口がないので、ますます進学希望者は増加するであろう。

卒業生の進路には、体育大学や体育学部を持つ大学への希望が多いが、高校時代に獲得した特技を生かしたいと望む者が多い。いわゆる推薦入学をねらうのである。例えば、筑波大学のように制度的推せん入学(体育専門学群:定員240人、推せん入学は定員の約30%)を決めて

いるところもあり、この制度を望む声が大きく、かつそのわくの拡大を強く望んでいる。

わが金沢大学においてもこのことが検討されているし、教員養成大学のこのような措置が望まれている。

(2) 推薦入学の問題

推薦入学の制度を持っている国立大学(体育関係)は次の四大学だけである。

筑波大学においては定員240人の約30%を入学させることになっている。各スポーツの技能の国際的、日本的なレベルの者がこの制度によって入学していることはよく知られている。

第一次選考は書類により、第二次の選考は、面接、小論文、および精密検査によることにしている。

福島大学においては、中学校教員養成課程の保健体育に2人、特別教科(保健体育)教員養成課程に6人の推薦入学が認められ、その要件は、健康で各学校教育に熱意あるもので、高等学校における学習成績概評が3か年において、各学年とも同一学年の生徒全員の上位10%以内にあるものとなっている。

二つの教員養成課程を相互に第1志望・第2志望とすることを認める。ただし、高等学校長が推薦できる人員は両課程を通して1名とする。

静岡大学においては、中学校教員養成課程の保健体育に約5名の推薦入学の定員を持っている。

推薦要件や選考方法は細部にやや上記の福島大学とその記述はことになっているが大綱は酷似している。

昭和59年から学生募集をする鹿屋体育大学は、次のような推薦入学の制度を持っている。

鹿屋体育大学の体育学部は体育・スポーツ課程(80)と武道課程(60)を持ち、その約20%以内を推薦入学させることにしている。

推薦要件は、(1)昭和59年3月高等学校卒業見込みの者で、調査書の学習成績概評がA段階に属する者、(2)体育実技の分野に特にすぐれた能力を持つ者とし、選考方法は、(1)基礎運動能力検査、(2)実技検査(武道課程のみ)、(3)小論文、

(4)面接によることとしている。

以上のような制度はあるにしても、その数はいたって少ない。体育学科を卒業してこれに該当するものは至って少数であるので、そのわくを広くして欲しいという声が強い。

(3) 就職について

高等学校の体育学科・コースの卒業生にとってそれにふさわしい職業はあまり見当たらない。このことは、体育学科・コースを設置している高等学校の共通の悩みである。

高等学校卒業程度の指導力は、日本体育協会のスポーツ指導員、あるいは、各種職場のスポーツの指導者、さらに、市町村の教育委員会などが実施するスポーツ教室などの実際の指導者としてはふさわしいものと思われる。現に、高校時代に、実習として行っている学校もあるし、定職としての道を開拓すべきであろう。

何といても、未開拓な分野であり、学校当局や体育学科・コースの関係者の今後の努力に待ちたい。

(4) 進路変更の問題

昭和53年の文部省調査によると、全日制の高等学校では、普通科の0.9%（約2万5千人）、専門学科の2.4%（約2万4千人）が中途退学し、その主な理由は、①学校生活、学業不適應、②進路変更、③学業不振であったといい、私立高等学校では更に多く、中途退学者は実に4万人を越え、全日制の普通科約2万5千人（中退率2.7%）、専門学科約1万4千人（中退率4.3%）であったという。

1年に2千学級（16,041人）の高等学校生徒がドロップアウトしていくことは、中学校から高等学校への進路指導の大切さが指摘されている。

このような進路変更の問題を背景として、体育学科・コースに入学しながら、中途挫折する者もかなりあるようであるので、生徒指導には特に注意が必要である。

(5) その他の問題

体育学科の理論のカリキュラムは、普通科の体育理論より広範囲にわたり、その程度も高い

とみなければならない。これが、体育学科の特徴の一つともなり、専門性となっている。それにもかかわらず、単位数もそれにふさわしいほど多くなく、これに関する適当な教科書もないので、その著作が強くのぞまれている。

そのほか、スポーツの練習に必要な設備、合宿所、寮などの宿泊施設を望む声が強い。スポーツの練習には必置されるべき施設であるからである。

あとがき

金沢大学十年史によると、昭和20年12月、石川県通常議会において北陸総合大学誘致に関する希望意見の開陳があり、県議会終了後、伊藤知事らを中心とする運動が展開された。

このことを契機にして、昭和21年6月3日に北陸総合大学設置期成同盟創立総会を開き、代議士をはじめ地方の有力者の中央への働きかけがはじまった。

昭和24年度には、教育の新しい制度が確立する見通しから、警視總監に転任した（22・2・5）広岡知事の文部省への働きかけは、当時の金沢医大、四高、金沢工専、金沢高師などの学校を基礎に、北陸総合大学の設立を期待していた。

北陸総合大学設立準備委員会が設置され（昭22・11・4）、つづいて北陸大学実施準備委員会（昭23・5・14）へとこれが発展し、さらに昭和24年4月6日には、金沢大学創設委員会（これは同年5月末日までつづく）へと発展をくりかえし、事務局を金沢医大にしている。

北陸総合大学から金沢大学へと発展していく過程において、特に、体育に関する高等学校教員養成課程の設立には、金沢医大秋元波留夫教授の発想が大きな力となった。

北陸地区は、もともと気象条件はよくなく、結核がまんえんしているといわれた。この地方病ともいえるものに全国に関心があり、この撲滅は国の方針でもあった。秋元教授は、そもそも精神・神経科を専門とするところであるが、北陸地方の住民の健康を増進するには、体育の振興こそ重要であり、それには体育の指導者の

養成が急務であるという考えであった。

かたや、昭和19年3月高等師範学校官制が改正公布され金沢高等師範学校が設置されている。体育の指導者の養成と高等師範が結びつくのは理の当然であり、ここに高等学校教員養成課程（保健体育）の設置が構想される必然性を見ることができる。

秋元は彼の幼小時代を東京小石川の大塚にあった東京高等師範学校のキャンパス内に居住し、東京高師の体育科の生徒に可愛がられた、という（談）。専門は医学であっても、人間の身体、特に疾病とともに健康問題に関心が高かったことと東京高師体育科とのつながりは、心のどこかで関連を持ち、体育に好意的であった。これが東京高師を卒業している大石三四郎とのかかわりを親密にしていた。すなわち、この両者の人間関係が体育（第3部）（昭和24年5月31日、その後昭和37年3月28日に第3部を体育科に特別教科体育科を特別体育に改称し、昭和48年4月1日に体育科を高等学校教員養成課程に特別体育科を特別教科（保健体育）教員養成課程に名称を変更している。）の課程の設置にあづかって力となったという見方ができるであろう。

金沢高等師範学校の体育の教授大石三四郎（現国立特殊教育研究所長）、石田保之（現金沢大学教育学部教授）もあづかって力となった。

金沢大学設立の最終段階は金沢大学創設委員会による、学部、講座編成、職員などの準備であった。

かくして教育学部の学生定員は下の通りにきまったのである。

学 科	1 学 年 収容定員	総 学 生 収容定員	
教育学科 第1部（小・幼）			
	甲80	320	甲4年制
	乙80	160	乙2年制
第2部（中）			
	甲80	320	
	乙80	160	
第3部（高）			
	定員ナシ		
	体育30	120	体育4年制

この第3部という正式名称は、高等学校教員養成課程のことである。その後特別な教科を教育する教員の養成が困難であることから1952年には、東京学大（書道）、金沢大（保健体育）、京都学芸大（図画工作）、大阪学芸大（音楽）、愛媛大（ろう学校教員）に「特別教科教員養成課程」がはじめて設置され、その充実がはかれることになる。

したがって、本学では二つの教員養成課程が設置されることになり、保健体育の教員養成に関しては全国に類をみない大学となったのである。

最後に、体育学科の経営に関しては、梅本、庄司氏（文献27）と特に次の高等学校の具体的好例を引用させていただいた。

（大社高教、添上高校、八千代高校、及び日川高校など）

重ねて、ここに深甚の謝意を表わす次第である。

参考文献・資料

1. 全国高等学校体育学科連絡協議会：第17回全国高等学校体育学科連絡協議会資料，1982
2. 文部省：指定統計13号，学校基本調査報告書，1982
3. 鹿児島県立鹿児島南高等学校：体育科要覧，1982
4. 東京都立駒場高等学校：保健体育専門学科要覧，1982
5. 学校法人，浪商高等学校，学校要覧，体育科入学案内，1982
6. 学校法人，北陸大谷学園，北陸大谷高等学校：学校案内，学校管理計画，1983
7. 大分県立佐伯鶴城高等学校：学校要覧，学校案内，体育科のあゆみ：1982，体育科案内，1983
8. 千葉県立八千代高等学校：体育科入学案内，1983
9. 埼玉県立大宮東高等学校：学校案内，1983，体育科の現状と課題，1982
10. 山梨県立日川高等学校：学校便覧，1983
11. 奈良県立添上高等学校：体育科要覧，1983
12. 島根県立大社高等学校：学校便覧，1983，体育科入学案内，1983
13. 大阪市立桜宮高等学校：学校要覧，1982，体育科入学案内，1982，体育科施設，設備概要，1982
14. 岡山大学高等学校：学校案内，生徒募集要項，

1983

15. 新田高等学校：便覧，生徒募集要項，1983
16. 鳥取県立由良育英高等学校：学校便覧，体育科コース，1982
17. 鳥取県立米子高等学校：学校便覧，体育コース，1982
18. 石川県立穴水高等学校：学校便覧，1983
19. 新潟青陵高等学校：学園要覧，1983
20. 神奈川県立荏田高等学校：生徒の個性に応じた特色ある教育課程の開発——体育コースを中心とする教育課程編成，1983
21. PL 中，高等学校入学案内：1984
22. 金沢大学：金沢大学十年史，1960
23. 海後宗臣：戦後日本の教育改革，第 8 卷，教員養成
24. 国立教育研究所：日本近代教育百年史，第 6 卷，学校教育，4，1974
25. 文部省：大学一覧，1983
26. 全国短期大学受験案内 昭和59年度用，晶文堂出版，1983
27. 佐々木茂，山川岩之助：改訂高等学校学習指導要領の展開，保健体育科編，明治図書，1978